

広島県神石高原町出土遺物の資料紹介 — 旧豊松村域出土の井平コレクション —

野島 永・真木 大空
佐々木 尚也・名村 威彦

1. はじめに

広島県の中東部にある石灰岩地帯に分布する帝釈峡遺跡群の調査研究では、これまで洞窟・岩陰遺跡の発掘調査に主眼を置いていたが、帝釈峡遺跡群の分布域あるいはその周辺における開地遺跡については調査の対象とすることはほとんどなかった。また、一部周知されていた開地遺跡についても、その性格を把握するための調査はなされてはいないままである。2014（平成26）年度には、帝釈大風呂洞窟遺跡の発掘調査（市川・平尾 2016）を終了したことから、開地遺跡の確認のための実地踏査を行うこととした⁽¹⁾。

まず、はじめに帝釈峡遺跡群の大半が分布する広島県神石郡神石高原町周辺の縄文時代の開地遺跡の実地踏査に努めた。その結果、神石高原町金山遺跡、江草遺跡および中平遺跡群、堂面東遺跡、有賀遺跡などの縄文時代の遺物を含む開地遺跡の存在を確認することができた。なかでも旧神石町域⁽²⁾では、金山遺跡（神石高原町永野）が縄文時代の包含層をもつ遺跡であることが周知されていた。神竜湖の南西高台にあり、開地遺跡の立地としては最もふさわしい場所にあるといえる。水道管敷設工事の際に中津式・彦崎KⅡ式土器が採集されていたことから、縄文時代後期の遺構あるいは包含層が存在する可能性が想定されたが（中越 1996）、その後の調査は進展していない。

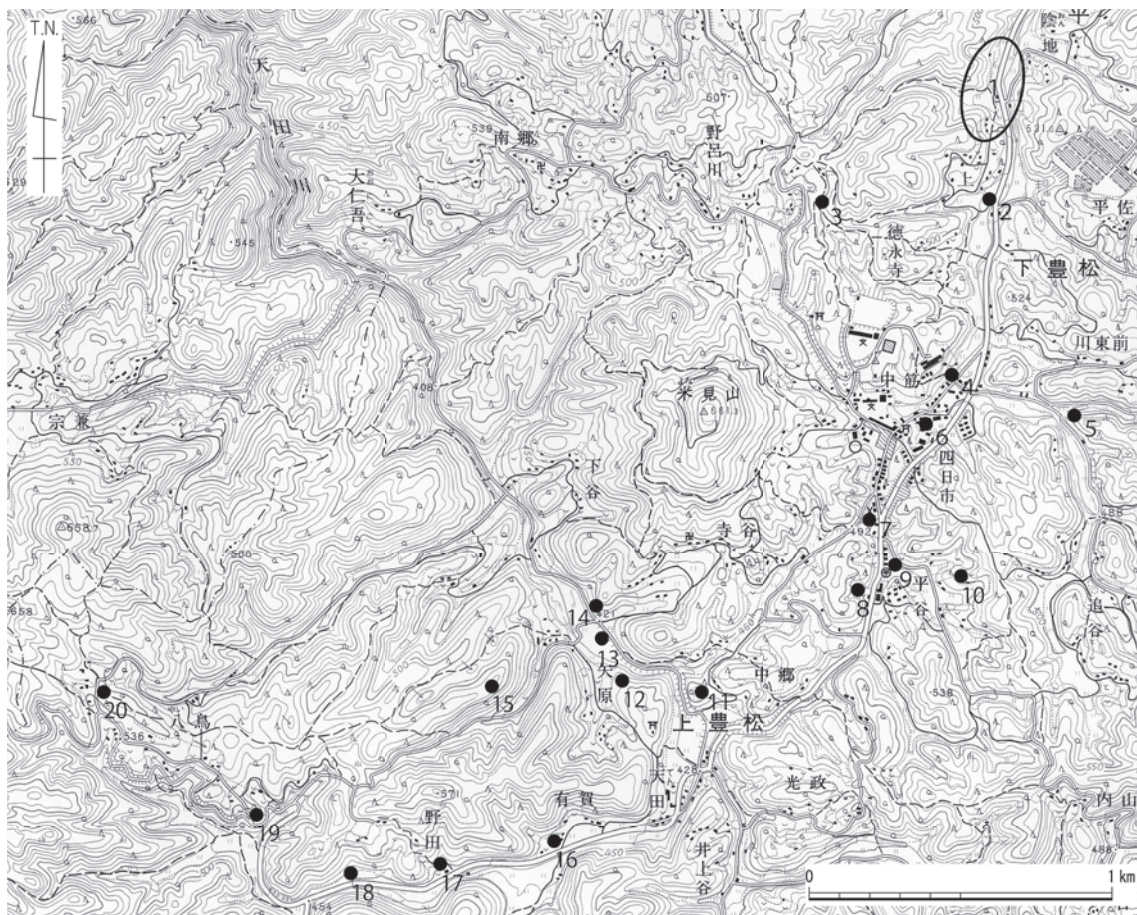
一方で旧豊松村域（現神石高原町豊松）に所在する中平遺跡群、堂面東遺跡、有賀遺跡などから出土した遺物については、当時旧神石町の文化財審議委員をしておられた井平軍治氏（故人）が収集されており、1992（平成4）年には「豊松村遺跡出土物調査書」と題した手書き冊子をまとめられた。井平氏はそれらの遺物の種類・数量だけでなく、出土地点や出土状況、簡単なスケッチなども書き残されており、遺跡の性格を推測するに足る情報が得られた。井平氏が収集しておられた考古資料の多くは、道路拡幅工事や圃場整備事業などにより偶発的に出土したものであるが、現在これらの遺跡についてはすでに遺存していないものも少なくない。当時の当該地域の状況からすれば、井平氏が収集していなければ、すべて散逸あるいは消滅していたと考えてもおかしくはなかった。なお、井平氏の収集したこれらの資料（井平コレクション）には、縄文



第1図 神石高原町立豊松収蔵庫（旧豊松村収蔵庫）
井平氏収集遺物の保管状況（2017年2月7日）

時代の開地遺跡出土遺物だけでなく、弥生時代・古墳時代の収集遺物についても重要なものがあると判断したことから、その一部を借り受け、紹介することとした。これまでも井平氏の収集された資料については、中越利夫氏（中越 1984b）や福井万千氏（福井 1985）によって紹介されたことがある。今回は後述するように、これまでに紹介された資料の一部も含めたが、多くは未公表資料である。中平1号遺跡・徳能遺跡・おもや遺跡・中郷古墳などの出土資料は現在、神石高原町立豊松収蔵庫（旧豊松村収蔵庫、第1図）に寄託・保管されており、おもや遺跡出土の弥生時代壺形土器2点は神石高原町立歴史民俗資料館に展示されていたため、神石高原町教育委員会の許可を得てそれらを借り出し、洗浄復原・記録・図化・写真撮影を行った。

なお、広島県教育委員会文化財課沖憲明氏には井平軍治氏の収集した遺物について、その所在をお教えいただいた。また、本資料の公表にあたっては、遺物の貸し出しをはじめ、遺跡踏査、ドローン撮影などさまざまな調査活動において、神石高原町教育委員会生涯学習課長片岡富美江氏をはじめ、生涯学習係長松本武士氏と後任の後藤輝明氏、教育課横山千恵氏には大変お世話になった。記して感謝したい。（野島）



第2図 旧豊松村遺跡分布図 (1/30,000)

1. 中平2～5号遺跡
2. 中平1号遺跡
3. 野呂川古墳
4. 川東遺跡
5. 狐塚古墳
6. 双子山古墳
7. 天王塚古墳
8. 久保の西遺跡
9. 平谷遺跡
10. 栗森遺跡
11. 中郷古墳
12. おもや遺跡
13. 堂面東遺跡
14. 豊松堂面洞窟遺跡
15. 矢原古墳
16. 有賀遺跡
17. 野田遺跡
18. 二反田遺跡
19. 戸手古墳
20. 八鳥古墳

2. 縄文時代の遺物（写真図版第1・9）

（1）中平1号遺跡

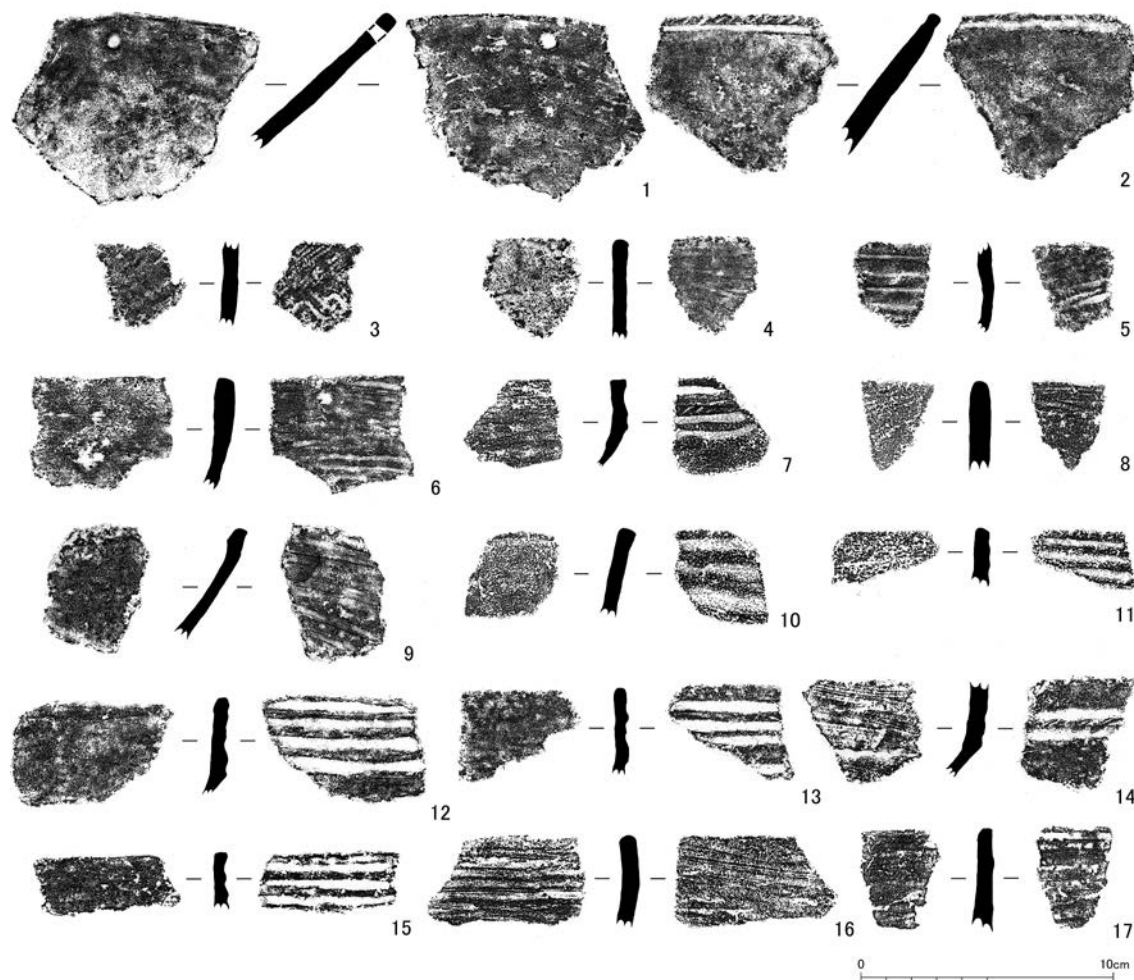
井平氏の手書き冊子『豊松村遺跡出土物調査書』（1992）によると、豊松中平周辺では5つの地点で考古遺物が確認されており、それぞれ中平1～5号遺跡とされたようである。なかでも中平1号遺跡からは最も多くの遺物が採集された。中平1号遺跡は、神石高原町豊松中平にある。周囲を比高差30～40mの小丘陵に囲まれており、県道106号線が沿う高梁川水系仁吾川流域に位置している（第2図）。

井平氏の調査書によると、県道106号線の敷設工事にともない、仁吾川西岸から縄文土器や石器が出土したようである。「石鏃4点・獣骨・打製石斧1点・磨石1点・縄文土器片100点・サヌカイト製切片多数・敲石」の収集がなされたことがわかる。豊松収蔵庫において確認したところ、縄文土器の細片や石器のチップが多く、容量約600mlのビニール袋に土器が1袋、石鏃や石器のチップが1袋にまとめて収納されていた。縄文土器は文様や調整などが確認できるもののみ抽出し、11点を図化した。そのほか石鏃3点、打製石斧1点を図化した。

a. 土器（第3図1～11）

縄文後期土器（3～11） 3～11はいずれも縄文時代後期土器である。3は外面に結節した縄文を施し、内面をナデで仕上げている。灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に径1～3mm程度の無色・白色造岩鉱物が含まれる。4～6・8・9は貝殻条痕土器である。4・6・8・9は外面に貝殻条痕調整が施され、内面はナデで仕上げている。4・6・8は直立する口縁をもつ粗製深鉢であると思われる。4は黄褐色を呈し、焼成はやや良好である。胎土に径1～2mm程度の無色・白色造岩鉱物を含む。6は灰黄色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土に径1～3mmの無色・白色造岩鉱物や、微量ではあるが金雲母を含む。8は黒褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に径1mm程度の無色・白色造岩鉱物や微量の金雲母を含む。9は口縁部が外傾しており、口縁部端が若干肥厚する。内湾しているため、粗製浅鉢の可能性もある。灰黄色を呈し、焼成はやや悪く、胎土に径1～3mm程度の無色・白色造岩鉱物、微量の雲母を含む。5は内外面ともに貝殻条痕が施された胴部片である。灰黄色を呈し、焼成は良好である。胎土に5mm以下の無色・白色造岩鉱物を含む。7・10・11は口縁部に凹線を施すものである。7は黒色を呈し、焼成はやや悪く、胎土には径1mm程度の白色造岩鉱物と2mm程度の黒色造岩鉱物を含む。内面をヨコミガキによって調整し、外面はナデで仕上げている。口縁部には上から3条の沈線と1条の凹線が施されていたが、上から2条目と3条目の沈線の間刻み目を施した際に上から2条目の沈線が潰され、2条の沈線と1条の凹線であるかのようにになっている。10・11は内外面ともにナデで仕上げており、口縁部には最低3条の凹線が施されている。10は黄褐色を呈し、焼成は悪い。胎土に径1～2mm程度の白色造岩鉱物と金雲母、径1mm以下のかんらん石を含む。11は灰黄色を呈し、焼成は悪く、胎土に径1mm以下の石英・長石を多く含む。

凹線文を用いる土器は後期後半に九州から北陸・東海地方の広範囲にわたって認められる（岡田 2008）ため、これらの土器はその形態上の特徴から縄文時代後期後半を中心とすると



第3図 旧豊松村遺跡出土遺物（縄文時代土器）（1/3）

考えられる。

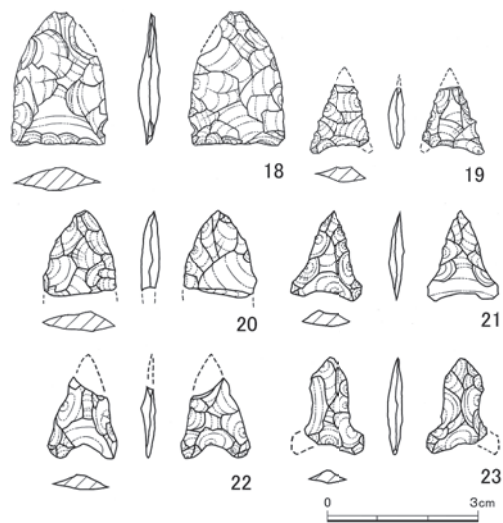
縄文晩期土器（1・2） 1は精製浅鉢である。内面はナデで仕上げられ、外面はケズリが施されている。黒褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に径1～3mm程度の白色造岩鉱物を含む。2は精製浅鉢である。口縁部の内外面に1条ずつ凹線を施し、口縁部内面から口唇部にかけて刻み目が施されている。内外面ともにナデによって仕上げられている。黒褐色を呈し、焼成はやや良好である。胎土に径1～2mm程度の白色造岩鉱物を含む。

b. 石器（第4図19～21・第7図24）

石 鏃（19～21） いずれもサヌカイト製の石鏃である。19は先端部と主面右側脚部を、20は基部を欠損している。完形品は21のみである。19は基部を弧状に浅く挟るシャープな形態をしており、全体的に細かな剥離によって成形されている。20は基部が欠損しているが、19・21とほぼ同じ大きさで残存しており、比較的大型の石鏃であったと思われる。正面の右側縁は細かな剥離によって刃部を形成し、裏面に主要剥離面が残っている。刃部が弧状をなし、幅広であることから形態的に新しい様相を呈していると考えられる。21は基部の挟りが深く、脚部が顕著につくり出されているものである。裏面に主要剥離面が残っているものの、

正面の右側縁の刃部は連続した剥離によって形成される。中平1号遺跡より出土した石鏃は縄文時代のなかでも新しい様相のものであり、縄文時代後・晩期ごろと考えることができる。

打製石斧 (24) 軽石質凝灰岩製の打製石斧である。ほぼ完形品で撥形をなしている。全体的に摩耗して剥離面は明瞭ではない。正面には自然面を、裏面には主要剥離面をのこしており、全面に加工が加えられず、辺縁を加工することで成形している。基部と刃部には使用した際に形成されたと思われる大きな剥離痕があり、基部を木柄に固定し強い力で使用したことが想定される。その形態から縄文時代後期と考えられる(幸泉 2007・2008)。



第4図 旧豊松村遺跡出土遺物
(縄文・弥生時代石鏃) (2/3)

c. 小 結

上記の観察から、中平1号遺跡は縄文時代後期から晩期を中心とする遺跡であると想像できる。中平1号遺跡の近隣には豊松堂面洞窟遺跡が位置している。しかし、豊松堂面洞窟遺跡は縄文時代早・前期を中心に一部縄文時代後・晩期の遺物がみられており、後・晩期を中心とする中平1号遺跡とは時期が異なっている。また、豊松堂面洞窟遺跡の縄文時代後期土器は福田KⅡ式土器や津雲A式土器など縄文時代後期前半の土器が主であるが、中平1号遺跡からは縄文時代後期後半の土器がみられており、後期のなかでも利用されていた時期が異なっている。中平1号遺跡の出土遺物の中で特筆すべきものは打製石斧である。豊松堂面洞窟遺跡をはじめとする帝釈峡遺跡群とその周辺では洞窟・岩陰遺跡から縄文時代後期の打製石斧が出土した例はなく、遺跡群全体では2例目となる。初例は中越氏によって紹介された打製石斧であるが、これも中平1号遺跡と同じく開地遺跡からの出土である。打製石斧がいずれも開地遺跡から出土しているという点は重要である。土掘具(鈴木 1975、鈴木 1983、幸泉 2007・2008など)として使用されたものとするならば、根菜類などの生産に関わるような生活基盤が開地遺跡にあった可能性を示しているのかもしれない。漁撈・狩猟を生活の中心とし洞窟・岩陰遺跡に定住していたという帝釈峡遺跡群の生活復原とは異なる縄文人の生活を想像することもできる。

(2) 中平A遺跡

現在、中平A遺跡の所在地は不明であるが、神石高原町豊松中平の地名からとった遺跡名であると考えられるため、その所在地は中平1号遺跡と同じく神石高原町豊松中平であると考えられる。また、アルファベットの最初の文字である「A」が振られていることや出土遺物が中平1号遺跡と同じ時期のものが大半であることから、中平1号遺跡と同一の遺跡の可能性はあるが、詳細は明らかでないため別個の遺跡として紹介する。出土遺物は縄文土器の

口縁部が8点、石鏃2点、石器のチップがビニール袋1袋分であったが、そのうち図化したのは縄文土器の口縁部6点と石鏃2点である。このほか、後述する古墳時代の遺物として製塩土器の口縁部が1点みられる⁽³⁾。

a. 土器 (第3図12～17)

12・13・15は口縁部に凹線を施すものである。12は外面に貝殻条痕を施した後、ナデ消している。内面はナデで仕上げている。口縁部にはほぼ等間隔に4条の凹線が施されている。焼成は良好で、胎土に径1mm以下の白色造岩鉱物を含んでおり、粘土を精選している。13の外面調整は風化による摩耗のため不明であるが、内面は貝殻条痕後ナデを施している。15は最低3条の凹線が施された口縁部で内外面の調整は風化により不明である。胎土に径1～3mm程度の白色造岩鉱物を含んでおり、施文は12とよく似るものの胎土が大きく異なっている。焼成は良くない。14は外面をナデで仕上げ、内面は貝殻条痕で調整している。浅鉢の頸部屈曲部であると考えられ、屈曲部に2条の凹線を施し、その間に刻み目が施される。16は外面に貝殻条痕を施した後ナデで仕上げ、内面は貝殻条痕と一部ナデで調整される。胎土に径1mm程度の白色造岩鉱物を含む。焼成は良好である。17は内外面ともに貝殻条痕で調整されている。胎土に少量の繊維質を含んでおり、多孔質気味でやや軽量である。豊松堂面洞窟遺跡で出土した前期羽島下層式土器によく似たものがあるが、これ以外に縄文時代前期の遺物が出土していないため判断が難しい。

b. 石器 (第4図22・23)

22・23は安山岩製の打製石鏃である。22は先端部を、23は正面左側の脚部を欠損している。22は基部の抉りが深く脚部が突出するが、シャープさを欠いた形態をしている。23は基部を弧状に抉り脚部が張り出した形態をしている。正面の右側縁は連続する剝離によって刃部を形成した後、調整剝離を行っている。裏面は基部から左側縁・右側縁の順に刃部を形成している。いずれも縄文時代の石鏃の中では新しい様相を呈しており、縄文時代後・晩期ごろになると考えられる。

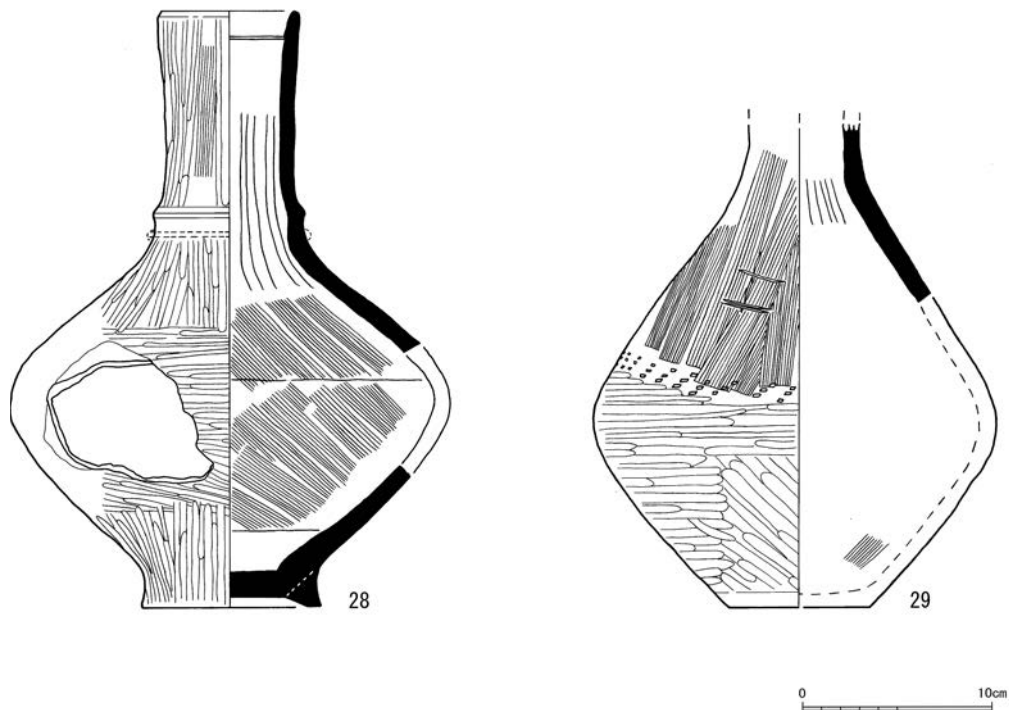
c. 小 結

中平A遺跡から出土した遺物と中平1号遺跡から出土した遺物を比較すると、時期的にかなり近いことがわかる。しかし、中平A遺跡には前期に属するとみられる土器が確認されたことや、晩期土器が出土していない点などの相違点がみられた。(佐々木)

3. 弥生時代の遺物 (写真図版第2～4・9)

(1) おもや遺跡

おもや遺跡は、県道9号線と県道106号線が合流する地点から、北西へ約500m、周囲を比高差30～40mの小丘陵に囲まれた谷筋のやや奥まった地点に位置する。この谷筋には、高梁川水系天田川が流れており、現在は田畑が広がっている(第2図)。井平氏の調査書(井平1992)によると、これらの田畑造成にともない弥生土器や石器が出土し、土地所有者から井平氏が譲り受けた後に豊松収蔵庫に寄託されたようである。寄託されていた遺物は弥生土器10



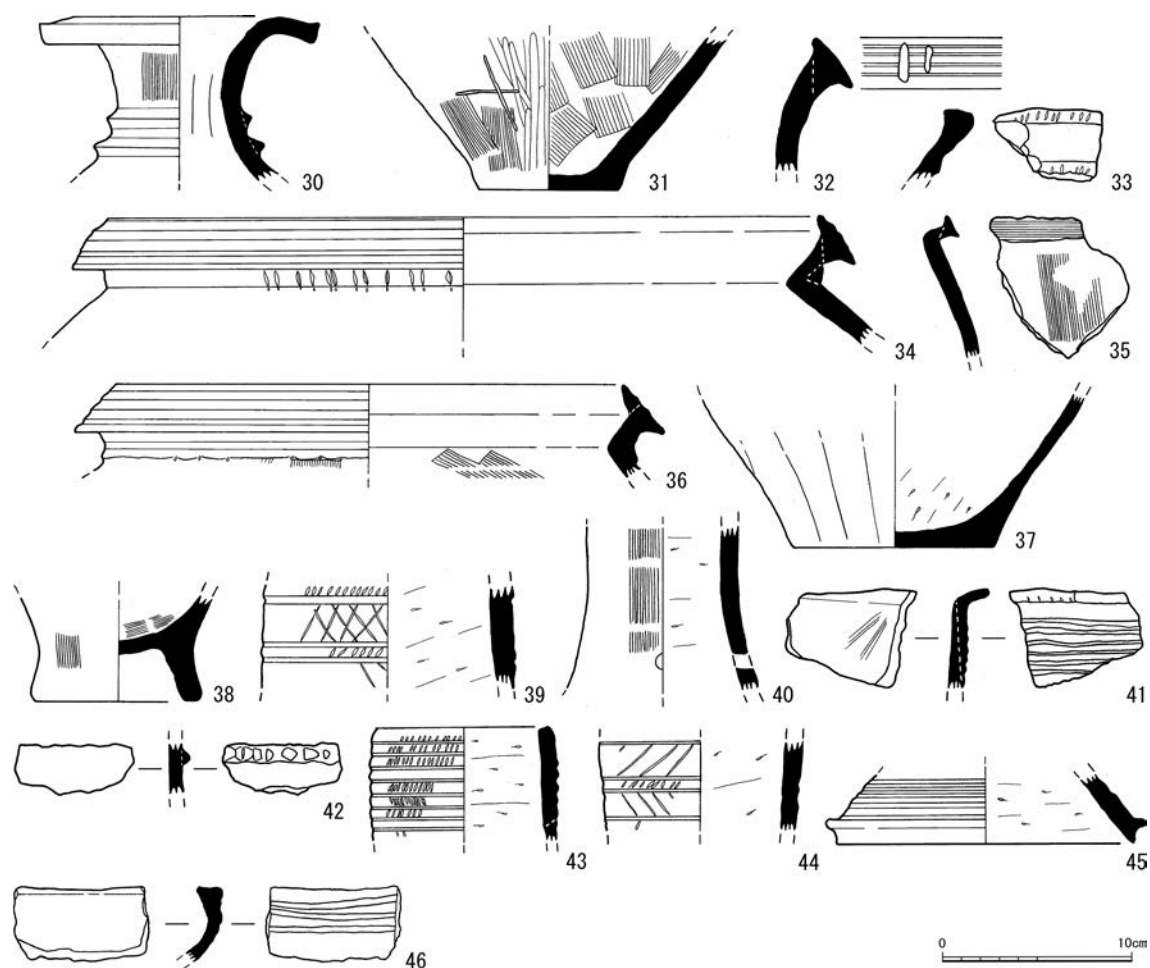
第5図 旧豊松村遺跡出土遺物（弥生時代土器1）（1/4）

点、石庖丁1点である。以下では、遺存状況がよいものと時期比定が可能なものを抽出して紹介する。

a. 土器（第5図28・29、第6図30・31）

壺（28～30） 28はほぼ完形の壺で、低い脚台と長い頸部をもつ⁽⁴⁾。頸部下端に2条の貼付突帯がみられるが、下方は欠損している。口縁部内面にはへら描き沈線が1条巡る。調整は胴部下位タテミガキ、胴部中位ヨコミガキ、胴部上位から口縁部にかけてタテハケ後タテミガキ、内面調整は胴部ナナメハケ、口縁部タテナデである。明褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。脚台は底部外面に粘土を貼りつけることで成形している。胴部中位に焼成後穿孔がみられる⁽⁵⁾。29は口縁部を欠損しているが、ほかに破損はない。胴部中位に楕歯状工具による刺突列点文がみられる。胴部上位に十字と直線2条を組み合わせた線刻がみられるが、これは明らかに新しいもので、おそらく出土した後に施されたものと思われる。外面調整は胴部下位タテ・ナナメミガキ、胴部中位ヨコミガキ、胴部上位から頸部にかけてタテハケ、内面調整は底部付近にややハケが観察される。内面は一面に炭化物が付着している。灰白色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の黒色造岩鉱物を含む。30は口縁部から頸部にかけて残存する。ほかに接合しない同一個体の口縁部片があり、図上で復原した。頸部に貼付突帯が2条みられる。外面調整は頸部タテハケ後ヨコナデ、口縁部ナデで、内面調整はナデ、頸部にはシボリ痕が残っている。内外面に赤色顔料が塗布されている。淡い褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の無色・白色造岩鉱物を少量含む。

底部（31） 31はおそらく甕かと思われる底部である。文様はみられない。外面調整はタテ



第6図 旧豊松村遺跡出土遺物（弥生時代土器2）（1/4）

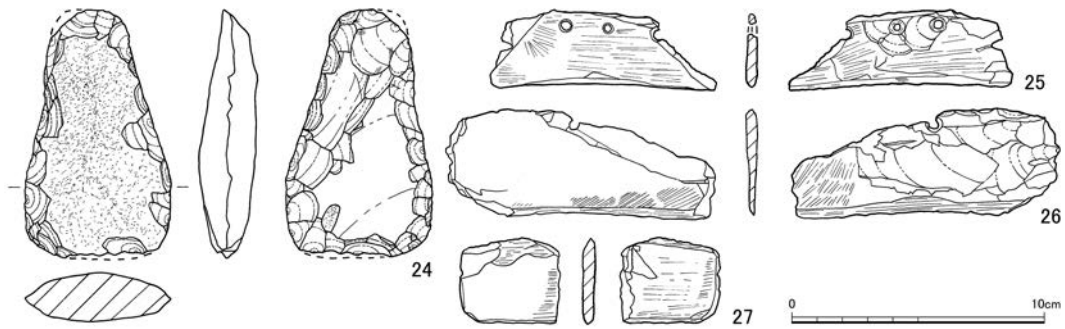
ハケ後タテミガキで、内面調整はタテハケである。底部はおそらく円盤充填法により成形されている。29と同じく器面に十字の線刻がみられるが、これも出土後に施されたものと思われる。外面は灰白色、暗灰色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を多く含む。

b. 石器（第7図25）

石庖丁（25） 井平氏の調査書（井平 1992）によれば、石庖丁が2点出土したという記載があるが、1点しか確認できなかった。25は頁岩製の磨製石庖丁である。穿孔は3カ所認められ、いずれも両面穿孔である。両面ともに全体を丁寧に磨いて仕上げているが、裏面には剥離痕が残されている。

c. 小 結

これらの土器は、弥生時代中期中葉に属する。28の焼成後穿孔については註で詳述しているが、この穿孔が弥生時代に行われたものであるとすれば、注意すべき要素である。備後北部で焼成後穿孔の土器が多くみられるようになるのは中期後葉になってからであり、それらの土器は墳丘墓に供献されることから、おもや遺跡にも墳丘墓もしくは祭祀遺構などが存在した可能性が高い。そうであれば、土器に焼成後穿孔を施し、祭祀に用いるという行為の初源的な例として捉えることができる。周辺地域に目を向けると、同形態の壺は出雲、伯耆、



第7図 旧豊松村遺跡出土遺物（縄文・弥生時代石器）（1/3）

備前などでもみられ、いずれも中期中葉から後葉に比定できる。そのなかで、岡山県岡山市津島遺跡の井戸の可能性のある土坑から出土した例は、胴部下半に焼成後穿孔が施されており、類例として捉えることができる（團 2005）。備後北部との関係はいまひとつ明瞭ではないものの、おもや遺跡所在地が高梁川水系に属していることから、吉備中枢部とのつながりも十分に考えられる。一方、土器のなかには常用土器もみられ、石庖丁も出土していることから、付近に集落遺跡が存在していたとも考えられる。図化できていない土器を含めても資料数が少なく断定はできないが、居住域と墓域が隣接して存在していた可能性がある。

（2）徳能遺跡

井平氏の調査書（井平 1992）によると、徳能遺跡出土遺物はブルドーザーによる畑の造成の途中で採集されたという。徳能遺跡は、『広島県遺跡地図』（広島県教育委員会 2000）では登録されているものの、所在地不明となっている。そこで、井平氏の調査書にある豊松村内遺跡分布図（井平 1992）と現地踏査の結果を合わせ、徳能遺跡の概要について述べる。

徳能遺跡は県道106号線から分岐した県道9号線が、国道182号線へ向かう中ほどに位置する（井平 1992）。おそらく、径15mの円墳である八鳥古墳が所在するあたりではないかと思われる（第2図）。土地所有者の畑造成中に遺物が出土たとされているが、ある程度広い範囲に分布していたことを推測させる⁶⁾。遺物は、コンテナ1箱分にも満たないものの、弥生土器や石庖丁、石鏃などがある。以下では、時期比定が可能なものを抽出して紹介する。

a. 土器（第6図32～40）

壺（32・33） 32は口縁部の一部が残存するのみで、回転体に復原できない。口縁端部を上下に拡張させている。口縁端部に4条の凹線文、その上から2条一対の棒状浮文が施される。調整は内外面ともにナデである。鈍い橙色を呈し、1mm以下の白色造岩鉱物を含む。33も口縁部の一部のみが残存しており、端部をやや肥厚させている。口縁端部外面に刻目文、その下方には貼付突帯の上から刻目文が施されている。調整は内外面ともにナデである。明褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。

甕（34～36） 34は口縁部の約8分の1が残存する。口縁部を上下に強く拡張させている。口縁端部に5条の凹線文、頸部には貼付突帯の上から刻目文が施されており、突帯直下には施文の際のヘラ状工具痕が残っている。調整は内外面ともにナデである。外面には炭化物が

付着している。暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には1mm以下の無色・白色造岩鉱物を含む。35は口縁部の一部のみが残存しており、端部をやや拡張させている。口縁端部に4条の凹線状のナデを施している。外面調整はタテハケ後ナデで、内面調整はナデである。黄灰色を呈し、造岩鉱物はほとんどみられない。36は口縁部の約8分の1が残存しており、端部を上下に強く拡張させる。口縁端部に5条の凹線文が施され、頸部には器壁がやや厚みを増す部分があり、端部に3条一組の何らかの刺突痕が残っている。外面調整は刺突痕より下方にタテハケ、内面調整は胴部ナナメハケ後ナデ、口縁部ナデが施される。淡褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色・褐色造岩鉱物を含む。

底部 (37・38) 37はおそらく壺かと思われる底部である。文様はみられず、外面調整は板ナデにより整形後不定方向のナデ、内面調整はタテケズリ後ナデである。明橙色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物が少量みられる。38は脚台をもつ底部で、おそらく壺かと思われる。文様はみられず、外面調整はタテハケ後ヨコナデ、内面調整は脚台部内面ナデ、胴部内面ハケである。内外面には炭化物が付着している。淡褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。

高 坏 (39・40) 39は脚柱部の破片である。3条の凹線文と各凹線文間に刻目文、斜格子文もしくは斜線文が施される。後者は金属器で加工したような鋭利な工具によって施文が行われている。豊松村内出土の44と同一個体の可能性がある。外面調整はナデ、内面調整はヨコケズリである。暗灰色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。脚柱部の形状や特殊な施文法・文様構成から、当該地域周辺に分布する注口付きの脚台付鉢(真木 2017)との関連が考えられるが、小片であるため断定はできない。40も脚柱部で、直径の約6分の1が残存している。文様はみられないが、径約6mmの円形透かしと形状不明の透かしが施されている。外面調整はタテハケ後ヨコナデ、内面調整はヨコケズリ後ナデである。褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。(真木)

b. 石 器 (第4図18、第7図26・27)

石 鏃 (18) 18は安山岩製の石鏃である。基部は平基式で、先端部に向かって弧を描くような形状をしており、青銅鏃を彷彿とさせる平面形である。両面加工によって製作されており、基部の縁辺部に細かな剥離調整がみられるが、刃部は比較的大きな剥離で成形されている。先端部や基部付近に欠損がみられるが、おそらく後世になされたものと思われる。(佐々木)

石庖丁 (26・27) 26は粘板岩製の磨製石庖丁である。穿孔は1カ所のみ確認でき、周辺を欠損しているものの、おそらく両面穿孔と思われる。厚さは主面右側端部付近が約8mm、ほかは約4mmとなっており、統一されていない。刃部を中心に丁寧に磨かれており、そのほかは粗く磨かれている。27は砂質ホルンフェルス製の磨製石庖丁である。大部分が破損しており、穿孔は確認できない。

c. 小 結

徳能遺跡は、井平氏採集の弥生土器の中で最も数量が多く、時期が判別できる遺物も少なくない。中期中葉から後期初頭の間収まることから、かなり長い期間、集落遺跡として存

続していた可能性が高い。ただ、39のような文様構成や施文は、周辺地域で出土する注口付きの脚台付鉢にみられ、墳丘墓や祭祀遺構から出土することが多い（真木 2017）。小破片であるため断定はできないが、徳能遺跡でも四隅突出型墳丘墓などといった墳丘墓、あるいは祭祀遺構が存在していた可能性がある。

（3）豊松村内

井平氏採集資料の中に、「豊松村内」と記載された遺物群がある。これらは出土遺跡が明確ではなく、資料的価値は低いものの、時期比定が可能なものを紹介する。

a. 土器（第6図41～46）

壺（43） 43は長頸壺の口縁部片で、約6分の1が残存している。現状で8条の凹線文が確認でき、各凹線文間に刻目文が施される。刻目文は一部方向が異なり、綾杉文状に施される部分もある。外面調整はナデで、内面調整はヨコケズリである。暗灰色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。

甕（41・42） 41は如意形口縁の一部が残存している。現状で口縁直下に6条の沈線がみられ、口縁端部にはヘラ状工具による刻目文が施される。調整は内外面ともにナデであるが、内面には工具痕が2条残っている。外面は茶褐色、内面は褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の無色・白色造岩鉱物を含む。42は口縁部に近い部分である。器壁の薄さからそれほど大きな個体ではないと思われる。貼付突帯が1条みられ、上から刺突文が施される。外面調整は不明で、内面調整はヨコナデである。褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の赤色・黒色造岩鉱物を含む。

高 坏（44～46） 44は徳能遺跡出土の39と同一個体の可能性がある。文様構成はおおよそ共通しているが、こちらでは斜格子文はみられず向きの異なる斜線文が施される。外面調整はナデで、内面調整はヨコケズリである。暗灰色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。45は脚部である。端部をやや上へ拡張させており、現状で5条の凹線文がみられる。外面調整はナデで、内面調整はヨコケズリである。褐色を呈し、焼成は良好である。1mm以下の白色造岩鉱物を含む。46は口縁部の一部である。文様は3条の凹線文がみられるのみである。外面調整は不明で、内面調整はヨコナデである。上半が褐色、下半が暗灰色を呈し、焼成は良好である。3mm以下の無色・白色造岩鉱物を含む。

b. 小 結

これらは、弥生時代前期から中期末葉に比定でき、やや時期幅をもつ。おもや遺跡の北西約250mの地点では、圃場整備にともなって遺物が採集されており、前期と中期に比定できる弥生土器が報告されている（中越 1984b）。また、これまで帝釈峡遺跡群における洞窟・岩陰遺跡の発掘調査で報告された弥生土器をみても、前期から中期の土器が大半を占めており、後期に属する土器はあまり確認されていない。「村内出土」とされる一群が一カ所で採集されたものなのか、遺跡認定されていない複数地点で採集されたものが集約されたのかは不明であるが、当該地域周辺では弥生時代前期から中期末葉にかけて人々の活動が比較的盛んであったと考えられる。 （真木）

4. 古墳時代の遺物（写真図版第5～9）

（1）中郷古墳

井平氏の調査書（井平 1992）によると、中郷古墳は米見山の南側、県道9号線と県道106号線が合流する地点から、北へ約300m、東西方向にのびる比高差約30～40mの丘陵尾根先端上に所在していたようである（第2図）。ブルドーザーによる圃場整備中に須恵器が出土したため調査を行ったとされており、須恵器の蓋坏・高坏・甕・短頸壺、その他破片のほかには鉄刀が出土したという。なお、古墳があった地点は現在ぶどう畑となっている⁽⁷⁾。

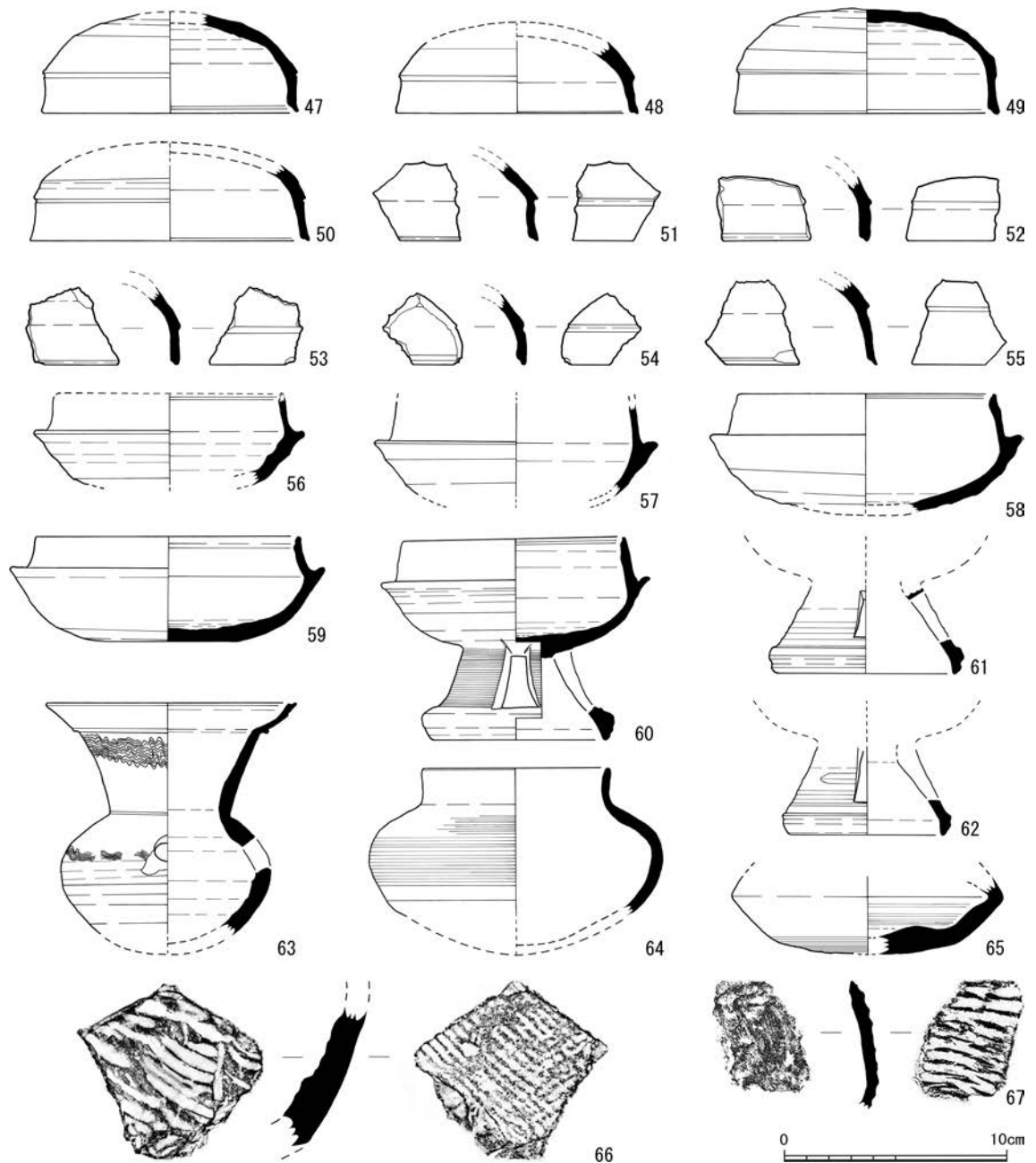
中郷古墳については過去に福井万千氏によって紹介されている（福井 1985）。福井氏によると、須恵器および鉄刀が古墳の棺材と思われる石とともに出土しており、葬送祭祀にともなう供献品であると推測されている。須恵器については坏蓋・坏身・甕・高坏・不明器種が出土したと紹介している。

a. 須恵器（第8図47～64）

坏 蓋（47～55） 天井部と口縁部の境の稜が鋭いものとやや鈍いものがある。口縁部は外湾するものがほとんどであるが内湾するものもあり、端部内面には段がつけられている。天井部は丸みをもっており、回転ヘラケズリは47・49では反時計回りに内側から外側に向けて施されたことが確認できる。47・48では天井部の約2分の1に、49・50では約4分の3に施されている。51～55は回転ナデで仕上げられている。内面は回転ナデにより平滑にされており、粘土紐の痕跡は顕著ではない。口径は復原が可能な個体では51がやや大きい、そのほかは同程度である。焼成は良好で、堅緻である。

坏 身（56～59） 立ち上がりは比較的高く、内傾するが、58以外は外反気味である。56・58・59の口縁端部内面には段がつけられている。受部は丸みをもち斜め上方にのび、立ち上がりとの境には浅い沈線が巡らされる。底部の形状は59が浅い平底である以外は丸みをもつ。底部外面のヘラケズリは58で反時計回りに内側から外側に、59で反時計回りに外側から内側に施されたことが確認でき、56・57では底部外面の約4分の3に、58・59では約2分の1に施される。そのほかは回転ナデで仕上げられる。内面は回転ナデにより平滑にされており、粘土紐の痕跡は顕著ではない。口径、器高ともにややばらつきがある。焼成は良好で、堅緻である。

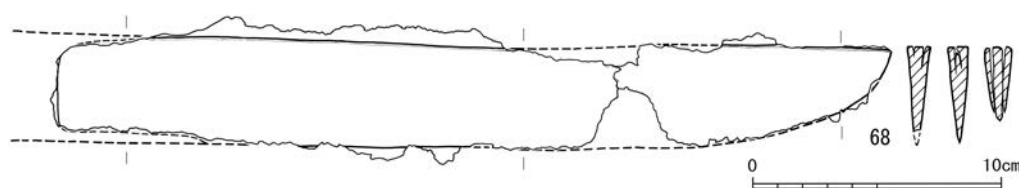
高 坏（60～62） 3点とも低脚高坏である。60は完形で坏部と脚部からなる。坏部の立ち上がりは比較的高く、やや内傾しながら反らずにのびる。口縁端部内面には段がつけられている。受部はやや鋭くほぼ平行にのび、立ち上がりとの境には深い沈線が巡らされる。底部外面のヘラケズリは反時計回りに内側から外側に向けて約3分の2に施されており、そのほかは回転ナデで仕上げられる。内面は回転ナデにより平滑にされており、粘土紐の痕跡は顕著ではない。脚部はハの字状に外反し、端部を肥厚させたあと内湾させながら丸くおさめている。台形の透かし孔が外側から内側に向けて三方向にあげられており、鋭い工具の痕跡が坏部底面に残っている。脚部外面には目の細かいカキメが施されている。脚部内面は回転ナデにより平滑にされており、坏部との境には接合痕が残っている。焼成はやや悪く、軟質で



第8図 旧豊松村遺跡出土遺物（古墳時代土器）（1/3）

ある。61・62は脚部の破片である。61はハの字状にまっすぐと下方にのび、端部を肥厚させたあと内湾させながら鋭くおさめている。62はハの字状にまっすぐと下方にのび、端部に突線状の段をつくり出したあと内湾させながら鋭くおさめている。61・62ともに外面上部には回転ナデ、下部には目の粗いカキメが施され、内面は回転ナデにより平滑にされている。また61・62ともに透かし孔の痕跡が破片の左右両端にみられ、台形の透かし孔が三方向にあげられていたと考えられる。焼成はよく、堅緻である。

甕（63） 胴部は中位で最大径をもつ玉葱形を呈し、短い頸部をもつ。頸部は斜め上方へ直線的にのびており、口縁部との境には段がつけられている。口径は胴部径より大きく、口縁



第9図 旧豊松村遺跡出土遺物（古墳時代鉄刀）（1/3）

部は内湾しながら大きく開く。口縁端部には浅い窪み状の段が付けられており鋭くおさまられている。頸部外面の上半には波状文が施されている。内面は口縁部から頸部にかけて回転ナデにより平滑にされている。胴部外面は中位よりやや上に波状文が巡り、円孔があげられている。底部は欠損しているが反時計回りに内側から外側に向けて、胴部中位から底部までの広い範囲にヘラケズリが施されている。胴部内面はほとんど調整されておらず、粘土紐の凹凸がみられる。焼成は良好で、堅緻である。なお、底部が欠損した状態で復原されているが、底部と思われる破片も収蔵されていた。

短頸壺（64） 横に長い扁平な球体をしており、肩はあまり張らずなだらかに下がる。口縁部は上方に直線的にのびており端部は丸くおさめている。口縁部内面は回転ナデにより平滑にされている。胴部外面は中位から上位にかけてカキメが施されているが上位ではやや不明瞭である。底部は欠損しているが胴部下位には反時計回りのヘラケズリが施されている。胴部内面は回転ナデにより平滑にされており、粘土紐の痕跡はみられない。焼成は良好で、堅緻である。 (名村)

b. 鉄器（第9図68）

鉄刀（68） 遺存状況が極めて悪い。棟側の表裏両面が剥離しており、芯金と合わせて3枚に遊離した状態となっている。現存長33.2cm、幅は中位で4cm前後、棟の厚さは鋒側で6～7mm、遺存状況がよい中央部分で8mm、把側で9～10mm程度に復元できる。把側でも断面矩形とならず、細い二等辺三角形となり刃部を形成することや、棟が最も厚くなること、芯金を中心に3枚に剥離する状況が鋒側とほとんど変化がないことから、把側は一部欠損したか、故意に破断したようでもある。把側刃部を観察すると、刃部を数cmほど欠損させ把部としたようにもみえる。

いずれにせよ、出土状況が明らかではない今、そのような可能性を指摘するだけにとどめたい。なお、刃部の破断面からは横山氏の分類した「貼り合わせA類」あるいは「挟み込みA類」の技法（横山 2016）によって製作された可能性が高い。 (野島)

c. 小 結

中郷古墳は農地の造成工事にともない破壊され、消滅したため、古墳の規模や遺物の出土状況などの詳細は不明である。出土している須恵器のうち坏蓋47～49は口径が11.0cm前後であり小型のものになる。50はやや大きく12.3cmである。天井部のヘラケズリは2分の1から4分の3の範囲に施される。また天井部と口縁部の境には稜界があり、口縁端部内側には明瞭な段がつくられる。こうした点からこれらの坏蓋は中村浩氏による須恵器編年（中村

2001)によると、I型式5段階にあたる。ただ、49のように天井部と口縁部の境の稜が鈍いものや50のように口径がやや大きいものもあるため、I型式5段階のなかでも新しいものと考えられる。坏身56・57のように器幅12.5cm前後の小型のものと58・59のように14.0cm前後のやや大型のものがある。底部外面のヘラケズリは大型のものは2分の1、小型のものは4分の3の範囲に施される。立ち上がりは内傾しながら上方にのび、口縁端部内側には段がつくられる。植田隆司氏は型式の設定に「たちあがり角度」を検討している(植田 2012)が、それを参考にした場合、56~58は11~15°になり、おおむねI型式5段階にあたる。しかし、59は20°となり、I型式5段階からII型式1段階にあたる。59は口径と器高の比率について、『年代のものさし—陶器の須恵器—』(宮崎・藤永編 2006)を参考にした場合、II型式1段階に属する。高坏はいずれも低脚で三方向の透かし孔をもつものであり、I型式5段階にあたる。甕は胴部中位に最大径をもつ球形をしており胴部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。頸部は太いがやや長い。口径は胴部径よりも大きく、口縁端部には浅い窪み状の段が付けられている。こうした点からI型式5段階からII型式1段階にあたると思われる。短頸壺は胴部上位に最大径をもち、外面にはカキメが施される。胴部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。口径はやや小さく、I型式5段階のなかでも新しいものと考えられる。

以上の点から、中郷古墳から出土したとされる須恵器はI型式5段階からII型式1段階の段階におさまり、同一遺構から出土した可能性は高いと言える。さて、広島県内において当該時期の須恵器が出土した遺跡のうち詳細が判明するものは23遺跡におよぶが、岡の段C地点遺跡(梅本 1994)の祭祀遺構出土のものを除けば、全て古墳からの出土である。それらのうち鉄刀や鉄剣が出土した例として金子第2号古墳(桑原 1982)や手坊谷第2号古墳(松村ほか 1976)が挙げられる。これらの古墳はいずれも径10m以下の円墳で埋葬施設に箱形石棺を採用している。中郷古墳からも須恵器とともに鉄刀が出土したとされていること、また埋葬施設を構成していたと思われる石材が確認されていることなどを踏まえると、中郷古墳も径10m以下で埋葬施設に箱形石棺を持つ小円墳であった可能性が想定できる。

(2) 双子山古墳

双子山古墳は広島県神石郡神石高原町下豊松に所在する。本古墳は米見山の東側、県道9号線と県道106号線が合流する地点から、北へ約350m、東西方向に2つ連なる比高差約10mの独立丘陵上に所在する(第2図)。神石高原町の豊松収蔵庫には1971(昭和46)年に井平氏によって表採された双子山古墳の須恵器片が寄託・保管されていた。

なお、双子山古墳が初めて紹介されたのは1927(昭和2)年に刊行された『神石郡誌』(伊藤 1927)である。それによると1899(明治32)年に東京帝国大学の坪井正五郎氏によって踏査されており、その調査記録が残っている。それによると、1897(明治30)年に村民によって掘削され、勾玉・管玉・切子玉・耳環・須恵器などが出土したという⁽⁸⁾。坪井氏の観察によると墳丘は「頭を南に向けた瓢形」であり、東側に開口した石室であるとされる。坪井氏は少なくとも二体分の人骨、兎の頭骨、鹿の歯を確認しており、これらのうち動物の骨

は生贄としてささげられたとしている。また、武具が副葬されていないことから女性が埋葬されたとも想定している。さらに西方にあるもう一つの丘陵上にある高まりも古墳であるとし、双子山古墳の被葬者の夫のものではないかと推察している。一方、西川宏氏は現地観察の所見から前方後円墳ではなく、細長い丘陵上に築造された円墳の可能性を指摘した（西川 1953）。

現在、双子山古墳は隣接する供養塔建設の際に墳丘が削平され、当初の墳丘形態を推測することはできない。また、天井石が露出した横穴式石室の付近に「孖山古墳」と書かれた石碑が立てられている。

a. 須恵器（第8図65・66）

平 瓶（65） 壺の底部の可能性もある。胴部中位から底部にかけての破片である。底部にヘラケズリを施したあとにカキメを施している。胴部中位で強く屈曲するIV型式1段階以降において散見される形態といえる。内面は胴部下位にカキメが施されており、底部にはナデの痕跡がみられる。

甕（66） 胴部の破片である。外面に目の粗い平行タタキが施されている。内面は緩い同心円状の当て具痕がみられる。内面は凹凸が激しく粘土紐の痕跡が顕著に残っている。焼成はやや悪く軟質である。他に同一個体と思われる破片が一片ある。

b. 小 結

先述したように、双子山古墳は1897（明治30）年に村民によって発掘された。その詳細は不明であるが、現存する石室のおおよその規模などから双子山古墳について考えてみたい。現地観察を行ったところ、地表に露出している部分からある程度の規模が推測できた。石室は東向きに開口しており、石室の開口部は幅約1.3m、奥壁側では幅約1.5mである。開口部から玄室奥壁までは約5.0mである。開口部から約2.0m離れたところに羨道を構成していたと考えられる石材がみられるため、羨道の途中から開口していると考えられる。このことから外護列石から羨道にかけては崩壊、流出した可能性が高く、石室全長はもう少し長かったものとみられる。開口部付近まで玄室であったとすると石室全長は最低でも7.0m前後はあったのではないかと考えられる。残存している石室天井石2枚が確認できる。1枚は石室最奥部の天井石であり幅135cm、長さ90cm、厚さ30cmである。もう1枚は開口部直上に残存しているが土に覆われており計測できない。また、墳丘上には「孖山古墳」と書かれた石碑が立てられているが、その台座部分に天井石と思われる幅180cm、長さ110cm、厚さ50cmほどの石材が使用されている。これが天井石であれば想定される石室の長さから、天井石は7枚程度あったのではないかと考えられる。

旧豊松村域における横穴式石室をもつ古墳の様相はあまり知られていない。隣接する旧油木町域ではいくつかの古墳が調査されているが、横穴式石室は全長3～5mのものが主体であり、双子山古墳の石室よりも小型である（油木町史編さん委員会 2004）。その中で油木高水池に所在する馬塚古墳の石室規模は双子山古墳のそれと類似する。馬塚古墳は直径15～16m、高さ4mの円墳であることがわかっており（網本 1993）、双子山古墳もほぼ同様の墳丘規模

であったと思われる。

(3) 中平A遺跡

縄文時代の出土遺物の項でも触れたが、中平A遺跡の所在地は不明であり、中平1号遺跡と同一の遺跡の可能性もなくはない。中平A遺跡では古墳時代の遺物として製塩土器1点がおさめられており、その概要を記す。

a. 土器 (第8図67)

製塩土器 (67) 口縁部の破片であり、器壁の厚さは3～4mm程度である。手捏ねによって成形されており、指頭押圧による凹凸がみられる。外面全体に条線状の平行タタキが横方向に施されている。内面は口縁部付近に横ナデが、それ以外は指頭押圧で調整されている。焼成は良好で、胎土は砂粒をあまり含まず精緻である。

b. 小 結

広島県内、とくに備後北部では山間部から製塩土器が出土する例は珍しくなく、三次盆地や庄原盆地に集中して出土することが指摘されている(古瀬 1994)。製塩土器は帝釈峡遺跡群では久代東山岩陰遺跡から出土しており(中越 2001a、吉川 2004)、本例もまた備後北部に広く製塩土器が持ち込まれていたことが判明する一例と言えよう。広島県の製塩土器は古瀬清秀氏によって型式分類と編年が行われている(古瀬 1994)。これを参考にすると中平A遺跡出土の製塩土器は口縁部付近まで平行タタキが施されていることや、器壁の厚さからⅡ類にあたりと考えられる。これは中村氏による須恵器編年(中村 2001)のⅡ型式1段階に併行する時期と考えられており古墳時代後期前葉ごろ、6世紀前半のものとされる(古瀬 1994)。外面全体に平行タタキを施す製塩土器は備後南部の海浜部では下迫貝塚(松崎・潮見ほか 1963)や馬取貝塚(松崎・潮見ほか 1963)、満越遺跡(森重 1984)など松永湾に面する遺跡で出土しているほか、備後北部の山間部では境ヶ谷遺跡(伊藤 1983)から出土している。いずれの地域も帝釈峡遺跡群からは地理的に離れており、どのような搬入経路で持ち込まれたものかは不明である。また、旧豊松村域を流れる帝釈川は高梁川の上流域にあたることから、備中南部からの搬入の可能性も考えられる。いずれにせよ、三次盆地・庄原盆地のみならず備後北部の山間部でも製塩土器の搬入が一般的であった可能性を指摘しておきたい。

(4) 豊松村内

出土場所は不明であるが旧豊松村内から出土したとされる古墳時代の遺物を紹介する。

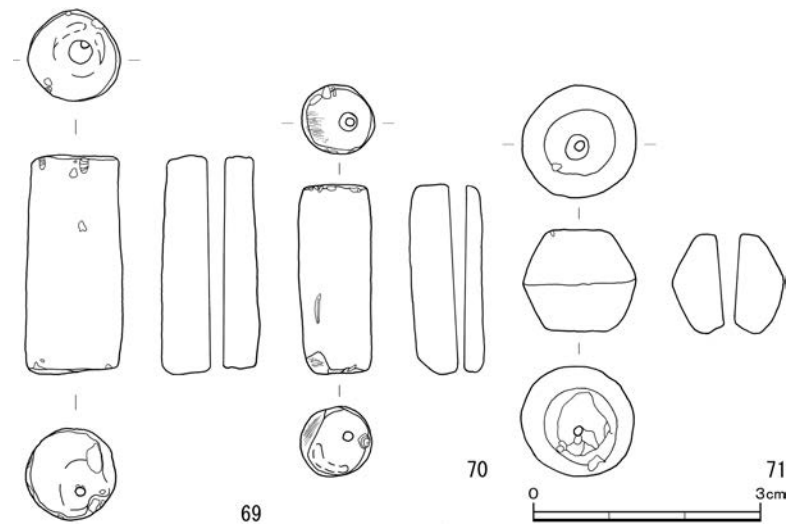
a. 玉 類 (第10図69～71)

管 玉 (69・70) ともに碧玉製である。69は太めで片面穿孔である。穿孔面や胴部には細かな欠損が多数みられるが、欠損面は角が取れ磨耗している。全体的によく研磨されており、表面に擦痕はみられない。70は細めで片面穿孔である。穿孔面や胴部には細かな欠損が多数みられるが磨耗している。胴部はよく研磨されており擦痕はみられない。穿孔面にはわずかに擦痕が残っている。

算盤玉 (71) 水晶製である。片面穿孔されており底面には円錐状の欠損がみられる。全体的によく研磨されているが、底面の割れ円錐に磨耗はみられない。

b. 小 結

管玉2点はどちらも花仙山産の碧玉製である。大賀克彦氏による玉類の型式変化(大賀 2013)を参考にすると、管玉はいずれも碧玉製管玉領域 Jfa に属しており古墳時代後期前半のものと考えられる。水晶製算盤玉の石材産地は不明であるが、古墳時代後期前葉から中葉にみられるものである。



第10図 旧豊松村遺跡出土遺物(古墳時代玉)(1/1)

これらの玉類が古墳時代後期前葉から中葉までのものとして共通しており、同一遺跡から出土した可能性もあろう。(名村)

5. おわりに

故井平軍治氏によって採集された旧豊松村域の未公表資料について概観した。とくに今回紹介した中平1号遺跡の縄文時代後期土器は開地遺跡の存在とその存続時期を示している。付近にある石灰岩洞窟遺跡である豊松堂面洞窟遺跡(中越 1980・1982・1983・1984a)は縄文時代早期から一部前期に利用されていたものであり、縄文時代後期にはすでに放棄、あるいは定住の利用がなされてはいなかった可能性が高い。おそらく縄文時代後期に植物質食料に依存する生産基盤をもつ開地遺跡に移り住むといった変遷を想像することができる。先述したように、縄文時代後期における開地遺跡の出現は帝釈観音堂洞窟遺跡から指呼の距離にある金山遺跡でも指摘されてはいたが、縄文時代後期には一部に開地遺跡における居住生活の機軸となっていた可能性さえ指摘できるかもしれない。今後は開地遺跡の調査も含めて総合的かつ多角的な研究を進めていきたい。

また、旧豊松村域では、おもや遺跡の焼成後穿孔の可能性のある壺や徳能遺跡の脚台付鉢の可能性のある土器片などからも、弥生時代中期中葉から後葉にかけて、初期の墳丘墓を含むような墓域が造営されていた可能性も指摘することもできた。

さらに、古墳時代中期末葉となる中郷古墳の出土遺物と思しき遺物群の紹介をすることができた。おそらくは箱形石棺などを埋葬施設とした小規模な墳丘をもつものであろう。製塩土器などからも、古墳時代後期を中心とした5世紀末葉から6世紀には、周辺地域との交易とともに当該地域における造墓活動が活発化してきたことも推察することができるだろう。井平軍治氏が収集されたこれら貴重な考古資料の公表を行い、広く神石高原町の文化財として認知されることを念じつつ稿を閉じたい。

なお、今回の資料紹介は平成28・29年度大学院文学研究科考古学研究室の資料実習授業に

おける遺物観察・実測・写真撮影をもとにしている。野島の指導のもと、実習授業に参加した大学院生、真木大空・佐々木尚也・名村威彦が分担して行った。第1節および第5節は野島が、第2節は佐々木、第3節は真木、第4節は名村がおもに執筆した。第2節の湿拓作製については永野智朗が協力した。最後に野島が全体の文体を調整して成稿した。(野島)

註

- (1) 洞窟・岩陰遺跡とその周辺部の開地遺跡をあわせて調査研究し、両者の関係性を追求することの重要性や、実際の成果事例については白石浩之氏(白石 2015)、水ノ江和同氏(水ノ江 2016)、森先一貴氏(森先 2017)らが指摘している。広島県教育委員会文化財課 沖憲明氏からも、帝釈峡遺跡群の性格を把握するためには、洞窟・岩陰遺跡だけでなく開地遺跡の分布やその機能について明らかにする必要があるとの指摘をいただいていた。
- (2) 2004年11月広島県中東部にある神石郡内の4町村(油木町・神石町・豊松村・三和町)が対等合併して、神石高原町となった。このため、行政区域としての町村は消滅したため、旧町村名で地域区分をした。
- (3) 岡山市埋蔵文化財センター主任田嶋正憲氏のご教示による。記して感謝いたします。
- (4) この長頸壺は、当時広島大学文学研究科大学院生であった小池伸彦氏(現在、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)によって1980年10月9日に実測されており、帝釈峡遺跡群発掘調査室に図面が残されていた。今回は、これをトレースして加筆を行った。なお、小池氏には、実測図の利用を快諾していただきました。記して感謝いたします。なお、おもや遺跡出土の完形に近い壺2点は、現在神石高原町立歴史民俗資料館に展示されており、2017年7月6日に実見させていただいた。
- (5) この穿孔に関しては、実見の結果から以下のようなことが考えられる。①外面剥離のない右側は比較的新しい割れで外側から打撃が加えられており、外面剥離のある左側は内側から打撃が加えられ相対的に右側よりも古い段階で穿孔が行われている、②右側の断面には接着剤の痕跡が見られ、穿孔はもともともう少し小さかったと考えられる、③頸部から胴部・底部を通して一周する割れの亀裂が外面剥離の一部を切っており(写真図版第2a)、亀裂が入った時点で左側の孔は存在していた、④石膏復原部と右側の断面は連続しており、おそらく同時に生じたものと思われる、⑤石膏部断面には土器の断面に押し付けたような痕跡がある、⑥土器の器形上、完形の状態では内側から打撃を加えることは不可能である。以上の点から考えると、可能性として以下のことが考えられるだろう。まず、外側から打撃が加えられ、現状より小さな穿孔があげられた。そこから工具を差し込むかたちで内側からの打撃により現在の左側の孔が作りだされ、右側は土器全体に亀裂が入ると同時に広がった。そして、おそらく右側は土器片が再度接着され、井平氏が土器を確認したときには現状の左側と石膏部分に孔があいていたと思われる。そして井平氏によって石膏復原がなされた後、何らかの原因で右側の土器片が再度剥離したと思われる。しかし、これらの過程がどこまで弥生時代に行われ、どこから現代に生じさせたものなのかは不明である。もともと完形で鋳作業によって偶発的に穿孔が生じた可能性もある。穿孔や刻線に関しては、出土遺構の推定や遺跡の性格を考える上で非常に重要な要素であるため、類例の確認を行いつつも、慎重に検討する必要がある。
- (6) 広島県遺跡地図(広島県教育委員会 2000)によると、県道建設工事に伴い破壊、消滅したとされる。
- (7) 広島県遺跡地図(広島県教育委員会 2000)によると、農地造成工事に伴い破壊、消滅したとされる。
- (8) これらの出土遺物の所在については明らかにはできなかった。

引用・参考文献

網本善光 1993 「町内の古墳」『油木の古墳と山城』油木町教育委員会、4～20頁。

- 荒平 悠・岩崎佳奈・竹村 崇・野島 永 2007 「久代東山岩陰遺跡（第24次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XX I、広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室、17～32頁。
- 石貫弘泰・順田洋一・永田千織 2006 「久代東山岩陰遺跡（第23次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XX、広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室、20～33頁。
- 市川伯博・平尾英希 2016 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第19・20次）の調査」『広島大学大学院文学研究科 広島大学考古学研究室紀要』第8号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、87～104頁。
- 伊藤愨爾 1927 『神石郡誌』神石郡教育委員会。
- 伊藤 実 1983 「境ヶ谷遺跡」『境ヶ谷遺跡群－庄原養鶏団地造成に係る埋蔵文化財の調査－』広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター、10～93頁。
- 井平軍治 1992 『豊松村遺跡出土物調査書』（手書き冊子）
- 植田隆司 2012 「古墳時代須恵器編年の限界と展望」『龍谷大学考古学論集Ⅱ－網干善教先生追悼論文集－』龍谷大学考古学論集刊行会、129～146頁。
- 梅本健治 1994 「岡の段C地点遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅳ、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター、20～356頁。
- 大賀克彦 2013 「玉類」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4、同成社、147～159頁。
- 岡田憲一 2008 「凹線文系土器（宮滝式・元住吉山Ⅱ式土器）」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会、650～657頁。
- 川越哲志 1976 「帝釈名越岩陰遺跡の調査」『帝釈峽遺跡群』（亜紀書房）帝釈峽遺跡群発掘調査団、104～122頁。
- 川越哲志・福井万千 1976 「豊松堂面洞窟遺跡の調査」『帝釈峽遺跡群』（亜紀書房）帝釈峽遺跡群発掘調査団、123～139頁。
- 川越哲志 1981 「豊松堂面洞窟遺跡（第12次）の調査」『帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』Ⅳ、広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室、31～40頁。
- 河瀬正利 1979 「豊松堂面洞窟遺跡（第10次）の調査」『帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』Ⅱ、広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室、21～26頁。
- 桑原隆博 1982 「金子古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（3）、広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター、5～68頁。
- 幸泉満夫 2007 「西日本初期扁平打製石鍬集成図譜」『山口県立山口博物館研究報告』33号、山口県立山口博物館、7～56頁。
- 幸泉満夫 2008 「西日本における打製石鍬の出現」『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』下條信行先生退任記念事業集会、23～39頁。
- 白石浩之 2015 「日本における洞穴遺跡の研究－縄文時代草創期を中心として－」『愛知学院大学文学部紀要』第44号、1～25頁。
- 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎・外山和夫・後藤和民・友永隆子・小宮恒雄・福井万千・堀部昭夫 1976 「帝釈寄倉岩陰遺跡の調査」『帝釈峽遺跡群』（亜紀書房）帝釈峽遺跡群発掘調査団、41～79頁。
- 鈴木次郎 1983 「打製石斧」『縄文文化の研究』7、道具と技術、雄山閣、48～59頁。
- 鈴木忠司 1975 「打製石斧」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会、149～190頁。
- 竹村 崇・荒平 悠・岩崎佳奈 2007 「久代東山岩陰遺跡の弥生土器」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XX I、広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室、63～70

- 頁。
- 團 奈歩編 2005 『津島遺跡』6、岡山県教育委員会。
- 敦賀啓一郎 1998 「帝釈峡遺跡群の石器組成」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XIII、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、67～88頁。
- 長井健二・山手貴生・松波静香 2008 「帝釈大風呂洞窟遺跡（第12次）調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、11～22頁。
- 中越利夫 1980 「豊松堂面洞窟遺跡（第11次）の調査」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』III、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、25～38頁。
- 中越利夫 1982 「豊松堂面洞窟遺跡（第13次）の調査」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』V、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、29～43頁。
- 中越利夫 1983 「豊松堂面洞窟遺跡（第14次）の調査」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』VI、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、25～37頁。
- 中越利夫 1984a 「豊松堂面洞窟遺跡（第15次）の調査」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』VII、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、20～30頁。
- 中越利夫 1984b 「豊松村堂面地区圃場整備区域内採集の石器時代遺物について」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』VII、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、43～63頁。
- 中越利夫 1996 「帝釈峡遺跡群の分布調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XI、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、95～101頁。
- 中越利夫 2001a 「久代東山岩陰遺跡（第18次）の調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XV、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、41～51頁。
- 中越利夫 2001b 「帝釈峡遺跡群の諸問題」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XV、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、67～89頁。
- 中村 浩 2001 『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房。
- 西川 宏 1953 「神石郡の古墳についての覚書」『芸備地方誌研究』No.3、芸備地方誌研究会、1～6頁。
- 広島県教育委員会 2000 『広島県遺跡地図』VII（その後、2011年からインターネットによる遺跡地図の情報公開がなされている（神石高原町に関する埋蔵文化財包蔵地情報 https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki_file/kyouiku/pdf/d_23jinsekikogen.pdf）。
- 福井万千 1985 「神石郡豊松村中郷遺跡出土の須恵器」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒』No.147、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、6・7頁。
- 古瀬清秀 1994 「広島県」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店、242～256頁。
- 真木大空 2017 「弥生時代中四国地方における注口付きの脚台付鉢形土器」『広島大学大学院文学研究科広島大学考古学研究室紀要』第9号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～24頁。
- 松崎壽和・潮見 浩・木下 忠・藤田 等・木村豪章 1963 「松永市馬取遺跡調査報告」『広島県文化財調査報告』第4集、広島県教育委員会、1～81頁。
- 松村昌彦・向田裕始・新谷宜昭 1976 「手坊谷遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会、66～119頁。
- 水ノ江和同 2016 「洞窟遺跡の調査研究と保護」『海と山と里の考古学』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会、79～90頁。
- 宮崎泰史・藤永正明編 2006 「須恵器の移り変わり」『年代のものさし－陶器の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館、17～37頁。
- 村上正名 1966 「油木・豊松地区の原始・古代前期の文化」『油木・豊松民俗資料緊急調査報告書』広島県

教育委員会、27～32頁。

- 森先一貴 2017 「旧石器時代から縄文時代草創期遺跡の保護」『月刊 文化財』7、No.646、4～9頁。
森重彰文 1984 『満越遺跡－製塩遺跡発掘調査報告－』尾道市教育委員会。
油木町史編さん委員会 2004 「原始・古代」『油木町史』資料編歴史、油木町、7～72頁。
横山瑛一 2016 「鉄製武器の銹化状況に基づく一考察」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室50周年 論文集・文集』広島大学考古学研究室、325～342頁。
吉川裕幸 2004 「久代東山岩陰遺跡（第21次）の調査」『広島大学文学部 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XVIII、広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室、23～29頁。

Archaeological Finds from Jinseki-kōgen Town: The “INOHIRA Collection” from Toyomatsu Village

Hisashi NOJIMA, Naoya SASAKI, Takehiko NAMURA, Hirotaka MAKI

The Department of Archaeology at Hiroshima University has carried out archaeological surveys at Jōmon rock shelters and cave sites in the vicinity of Taishaku-kyō in northeastern part of Hiroshima Prefecture for more than 50 years. However, to date, open sites in this region have not been investigated respectively, because none have been detected. A range of open sites in the vicinity of Taishaku-kyō were located and surveyed in this study in order to develop hypotheses regarding modes-of-life during the Jōmon period. Thus, one initially investigated a series of finds that had already been unearthed by chance as the result of agricultural land consolidation or cultivation in Toyomatsu village in the northern part of town of Jinseki-kōgen, formerly Toyomatsu village in the Jinseki district (*gun*). This town is located on the eastern side of the Taishaku-kyō area and all the artefacts examined were the property of the late Mr. Gunji INOHIRA, who collected them, compiled records, and left a series of documents regarding the remains of these sites before they were destroyed more than 20 years ago. These documents are therefore important reference materials enabling a deeper understanding of the archaeological sites in Toyomatsu village. This collection includes pottery of the Jōmon and Yayoi period, as well as stone tools from the Late Jōmon and the Middle Yayoi periods, and Sue ware, beads (necklaces), and ironware etc. from the Late Kofun period. The important “INOHIRA collection” is introduced in this report and some considerations regarding the archaeological sites in Toyomatsu village are presented.

第1表 出土遺物観察表1 (土器)

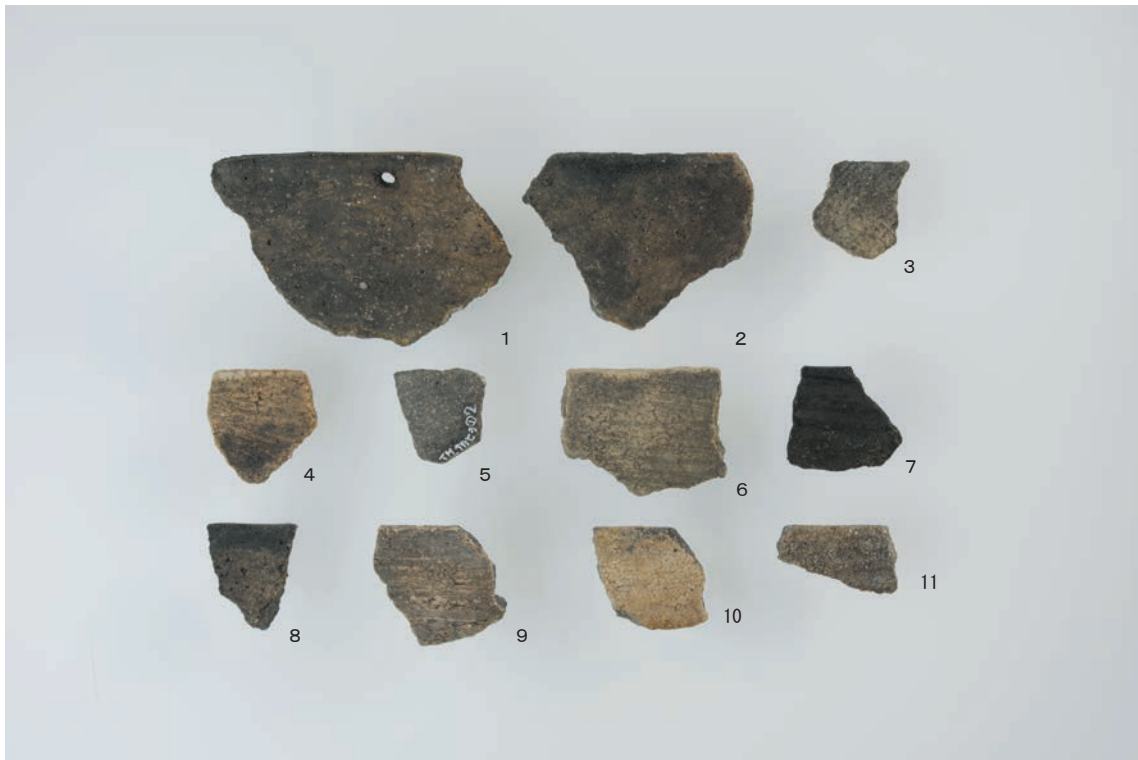
掲載 番号	遺跡名	土器 種別	時 期	法 量 (cm)					色 調		備 考
				器高 [現存値]	口径 [復元値]	胴部径 [復元値]	脚柱部径 [復元値]	底径 [復元値]	外 面	内 面	
1	中平1号遺跡	縄文 土器	晩期中葉	[7.5]					10YR3/1	10YR5/2	T.M. ナカヒラ ①12
2	中平1号遺跡	縄文 土器	晩期	[6.8]					10YR4/1	2.5Y4/1	T.M. ナカヒラ ①11
3	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[3.4]					5Y6/2~5Y4/1	5Y7/1	T.M. ナカヒラ ①17
4	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[4.9]					10YR6/3~ 10YR2/1	10YR7/4	T.M. ナカヒラ ①4
5	中平1号遺跡	縄文 土器	前期?	[3.3]					2.5Y4/1	2.5Y6/2	T.M. ナカヒラ ①2
6	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[4.3]					2.5Y5/2	2.5Y4/2	T.M. ナカヒラ ①1
7	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[3.6]					10YR2/1	2.5Y2/1	T.M. ナカヒラ ①21
8	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[3.6]					2.5Y3/2~ 2.5Y2/1	2.5Y3/1	T.M. ナカヒラ ①10
9	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[4.9]					10YR7/1~ 2.5Y4/1	2.5Y4/1	T.M. ナカヒラ ①14
10	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[3.6]					10YR7/4	2.5Y5/2	T.M. ナカヒラ ①16
11	中平1号遺跡	縄文 土器	後期	[3.3]					2.5Y5/2	10YR4/1	T.M. ナカヒラ ①19
12	中平A遺跡	縄文 土器	後期後半	[3.9]					10YR3/1	2.5Y4/1	T.M. ナカヒラ A32
13	中平A遺跡	縄文 土器	後期	[3.5]					10YR6/2~ 2.5Y2/1	10YR4/2	T.M. ナカヒラ A33
14	中平A遺跡	縄文 土器	後期後半	[4.0]					10YR7/2~ 2.5Y3/1	7.5YR4/4	T.M. ナカヒラ A31
15	中平A遺跡	縄文 土器	後期	[2.2]					10YR6/3~ 2.5Y5/1	2.5Y4/1	T.M. ナカヒラ A34
16	中平A遺跡	縄文 土器	後期	[3.6]					10YR6/3~ 10YR3/1	10YR5/2	T.M. ナカヒラ A29
17	中平A遺跡	縄文 土器	前期?	[4.0]					10YR6/3~ 10YR4/1	10YR6/3~ 10YR4/1	T.M. ナカヒラ A28
28	おもや遺跡	弥生 土器	中期中葉	23.4	5.0	17.3	6.8	6.0	2.5Y5/6	2.5Y2/1	
29	おもや遺跡	弥生 土器	中期中葉	[19.0]		15.9		5.6	5Y7/3	2.5Y2/1	
30	おもや遺跡	弥生 土器	中期中葉	[6.2]	[11.0]				7.5YR5/4	7.5YR5/6	T.M. オモヤ52
31	おもや遺跡	弥生 土器	中期中葉?	[6.0]				[5.5]	2.5Y6/3	5Y4/2	T.M. オモヤ51
32	徳能遺跡	弥生 土器	中期後葉	[5.2]					5YR5/6	5YR4/6	T.M. トクノウ 42
33	徳能遺跡	弥生 土器	中期中葉	[2.9]					5YR6/8	5YR6/8	T.M. トクノウ 38
34	徳能遺跡	弥生 土器	中期末葉	[5.1]	[28.0]				2.5YR4/6~ 2.5YR2/1	7.5YR4/4~ 7.5YR2/2	T.M. トクノウ 44
35	徳能遺跡	弥生 土器	中期中葉	[5.6]					2.5Y6/2	2.5Y6/4	T.M. トクノウ 39
36	徳能遺跡	弥生 土器	中期末葉	[3.7]	[20.0]				7.5YR6/4~ 10YR6/4	7.5YR6/6	T.M. トクノウ 46
37	徳能遺跡	弥生 土器	中期後葉?	[6.1]				8.1	7.5YR5/4	7.5YR6/6	T.M. トクノウ 40
38	徳能遺跡	弥生 土器	中期中葉?	[4.2]				5.3	10YR6/6	10YR4/1	T.M. トクノウ 41
39	徳能遺跡	弥生 土器	中期末葉	[4.1]			[10.0]		2.5Y4/1	10YR5/2	T.M. トクノウ 43
40	徳能遺跡	弥生 土器	中期後葉	[6.5]			[6.0]		7.5YR5/6	7.5YR5/4	T.M. トクノウ 45
41	豊松村内	弥生 土器	前期前葉	[3.9]					10YR4/2	10YR6/4	T.M. 100
42	豊松村内	弥生 土器	前期後葉	[2.0]					7.5YR5/4	10YR5/3	T.M. 99
43	豊松村内	弥生 土器	中期中葉	[4.4]	[5.8]				2.5Y4/1	5Y4/1	T.M. 101
44	豊松村内	弥生 土器	中期末葉	[3.5]			[8.0]		2.5Y4/1	2.5Y5/2	T.M. 103
45	豊松村内	弥生 土器	中期後葉	[2.7]				[11.6]	7.5YR5/6	5YR5/6	T.M. 104
46	豊松村内	弥生 土器	中期後葉	[2.9]					10YR2/1~ 10YR5/4	10YR2/1~ 10YR4/2	T.M. 102

47	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[4.5]	[11.4]					N6	N5	T.M. ナカゴウ 54
48	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[3.2]	[10.8]					5Y5/1	N4	T.M. ナカゴウ 61
49	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[4.6]	[11.6]					7.5Y4/1	5Y5/1	T.M. ナカゴウ 55
50	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[3.4]	[12.3]					N4	5Y5/1	T.M. ナカゴウ 57
51	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階～ II 型式 1 段階	[3.5]						5Y5/1	5Y5/1	T.M. ナカゴウ 56
52	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階～ II 型式 1 段階	[2.9]						7.5Y5/1	7.5Y4/1	T.M. ナカゴウ 58
53	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階～ II 型式 1 段階	[3.2]						5B5/1	5Y5/1	T.M. ナカゴウ 60
54	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階～ II 型式 1 段階	[3.2]						N6	N6	T.M. ナカゴウ 63
55	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階～ II 型式 1 段階	[3.5]						7.5Y6/1	7.5Y5/1	T.M. ナカゴウ 59
56	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[4.0]	[10.1]	[12.2]				N4	N5	T.M. ナカゴウ 66
57	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[4.3]		[12.8]				7.5Y5/1	10Y6/1	T.M. ナカゴウ 67
58	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[5.8]	[11.2]	[14.0]				N4	N6	T.M. ナカゴウ 64
59	中郷古墳	須恵器	II 型式 1 段階	4.8	[11.6]	[14.2]				2.5YR4/2～ 10YR5/1	5Y5/1	T.M. ナカゴウ 65
60	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	9.1	9.9	12.1	4.9	7.8		5Y6/1	5Y6/1	T.M. ナカゴウ 68
61	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[3.9]			[4.9]	[7.9]		7.5Y6/1	7.5Y6/1	T.M. ナカゴウ 70
62	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[3.9]				[6.7]		7.5Y5/1	7.5Y5/1	T.M. ナカゴウ 69
63	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階～ II 型式 1 段階	[10.3]	11.3	10.5				5Y6/1	5Y6/1～ 5Y6/2	T.M. ナカゴウ 71
64	中郷古墳	須恵器	I 型式 5 段階	[6.6]	[8.4]	[13.3]				5GY2/1～ 2.5GY7/1	5GY2/1～ 2.5GY7/1	T.M. ナカゴウ 72
65	双子山古墳	須恵器	II 型式 1 段階～	[3.5]		[12.2]				5Y6/1	5Y6/1	T.M. フタゴヤ マ73
66	双子山古墳	須恵器	不明	[6.4]						7.5Y6/1	7.5Y6/1	T.M. フタゴヤ マ75
67	中平A遺跡	製塩 土器	古墳後期	[4.9]						10YR5/3～ 10YR5/1	10YR5/2	T.M. ナカヒラ A30

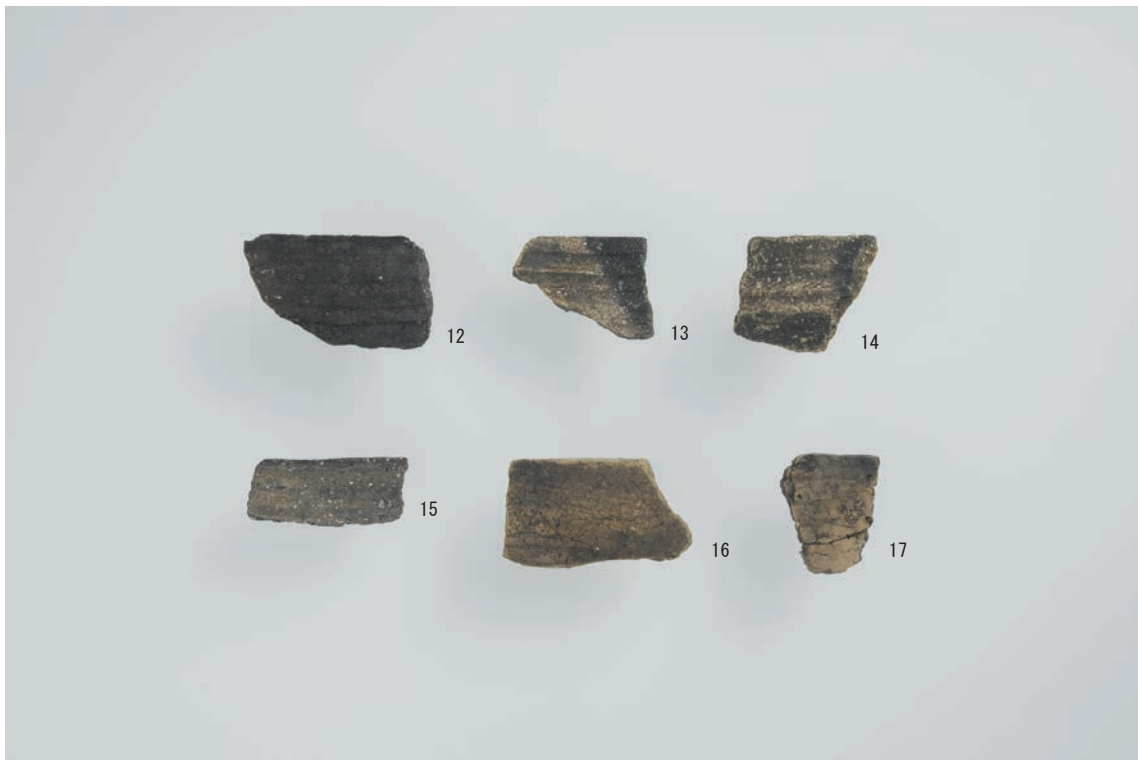
第2表 出土遺物観察用2（石器・鉄刀・玉類）

掲載 番号	遺跡名	遺物 種別	法量 (cm)			重さ (g)	備考
			長さ [現存値]	幅 [復元値]	厚さ		
18	徳能遺跡	石鏃	2.7	1.9	0.4	2.0	T.M. トクノウ49
19	中平1号遺跡	石鏃	[1.4]	[1.2]	0.3	0.4	T.M. ナカヒラ①24
20	中平1号遺跡	石鏃	[1.7]	[1.4]	0.4	0.9	T.M. ナカヒラ①22
21	中平1号遺跡	石鏃	1.7	1.4	0.3	0.5	T.M. ナカヒラ①23
22	中平A遺跡	石鏃	[1.6]	1.4	0.3	0.5	T.M. ナカヒラA36
23	中平A遺跡	石鏃	1.9	[1.2]	0.3	0.5	T.M. ナカヒラA37
24	中平1号遺跡	打製石斧	9.7	5.8	2.15	148.9	T.M. ナカヒラ①26
25	おもや遺跡	磨製石庖丁	[9.0]	2.9	0.55	18.7	T.M. オモヤ53
26	徳能遺跡	磨製石庖丁	[10.7]	4.2	0.8	35.8	T.M. トクノウ47
27	徳能遺跡	磨製石庖丁	[4.0]	3.4	0.8	11.4	T.M. トクノウ48
68	中郷古墳	鉄刀	33.2		0.6- 10.0	469.7	
69	豊松村内	管玉	2.89	1.2		8.1	T.M. 113
70	豊松村内	管玉	2.5	1.0		3.7	T.M. 114
71	豊松村内	算盤玉	1.35	1.5		4.0	T.M. 115

図版第 1



a. 中平 1 号遺跡出土縄文土器



b. 中平 A 遺跡出土縄文土器

図版第 2



a. おもや遺跡出土壺形土器



b. おもや遺跡出土壺形土器

図版第3



a. おもや遺跡出土弥生土器



b. 徳能遺跡出土弥生土器底部

図版第 4



a. 徳能遺跡出土弥生土器



b. 旧豊松村内出土弥生土器

図版第 5



a. 中郷古墳出土坏蓋



b. 中郷古墳出土坏蓋

図版第 6



a. 中郷古墳出土坏身



b. 中郷古墳出土坏身

図版第 7



a. 中郷古墳出土高坏

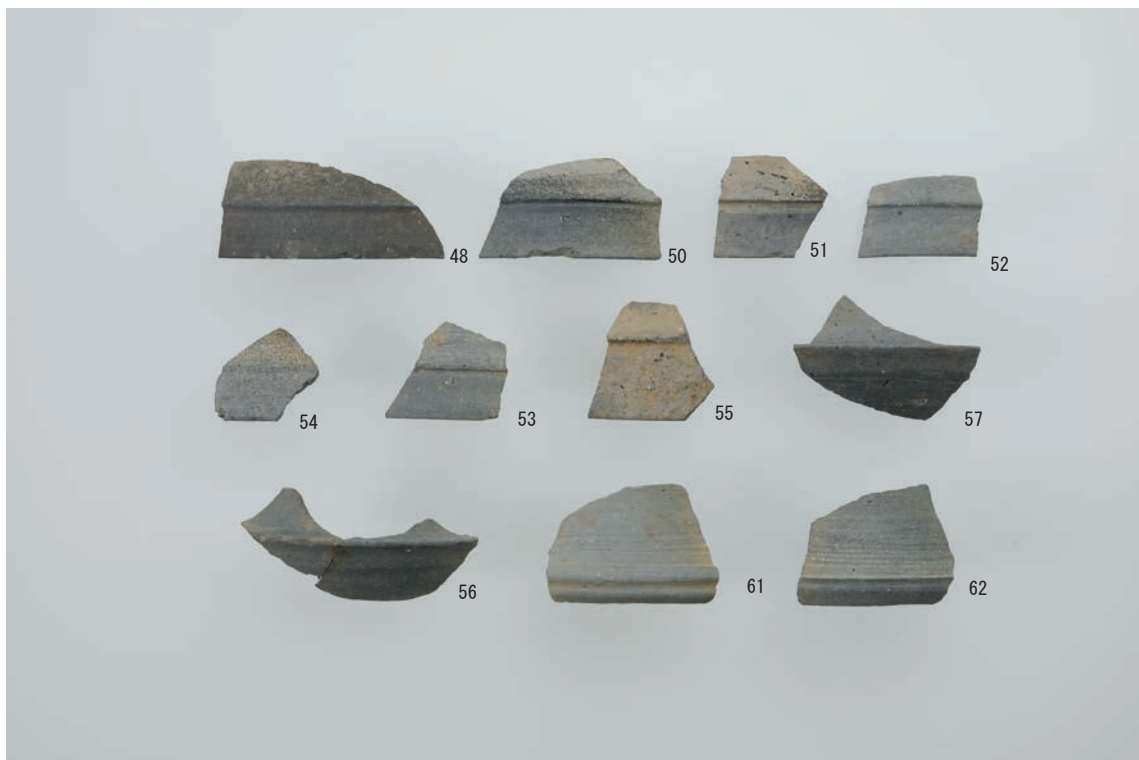


b. 中郷古墳出土壺

図版第 8



a. 中郷古墳出土小壺



b. 中郷古墳出土須恵器

図版第9



a. 中郷古墳出土鉄刀・双子山古墳出土須恵器・中平A遺跡出土製塩土器
(下段中央左は写真のみの紹介)



b. 中平1号遺跡・おもや遺跡・徳能遺跡出土石器と旧豊松村内出土玉類